朝までティファニー。
成人向

朝までティファニー。

ん……ここは…？

mission:
神羅ビルから脱出しろ！

ティファも居る…
他のみんなは
大丈夫なのか…？
……つか何で
俺とティファが
同室なんだ？

それにしても…
無防備な…

ぐぅ

ぅーん…

ごろん

ぎゅっ

!?

がばっ

なんとゆー！…
こ…これは…
ひょっとして
誘っているのか？

っ！

誘ってるに
決まってんじゃん！

ん？

ティファは起きてるよ……ってか同室になるよう仕組んだのはティファだしね！さっさと襲っちゃいなよ

襲っ……て……そ…そうなのかここは襲うべきなのか

そう！ここで手を出したら確実に嫌われる！そしたらもうクラウドは戻いたも同然！

そ！

ごく

ほらまずはその（ムダに）でかいオッパイムチャクチャにしてあげよ！

イッキW

ぼろW

お…おりゃ！！

ん…

ぱんっ
ぶわっ
ぐりぐり
いいの？
触るよ？
触っちゃうよ？
あ…ん
くわっ
うおおー!!!

いいよね!?
谷間にソーニューしちゃってもいいんだよね!?

あぁ…

ぬぬ…

ぶっ

ぶっ

ぶっ

もう…俺ガマンできないよ!?…ティファも準備オッケーみたいだ！

ほらぁ待ってるんだってば！レディーを待たせちゃ失格だよ!!

ドキ

ドキ

ドキ

ぐっ

ぐっ

ぐっ

俺が悪かったあぁ!!

もっとホンキで突かせてもらいますううう!!

じゃぶっ

ぐぼ

ひ……くぅ!!

ぎしゃっ

くぅーーーーー

はあぁっ!!

イク……

れ

ああ
はっ
俺の愛を受け取れええ!!
はっ
はっ
はー
はー
クラウド……
よ…
よかったね
脱出口できたジャン
しゅうう
おしまい

「ああ・・・・・入るべきか・・・・・入らざるべきか・・・・・」
ジョニーは迷い、決めかねていた。ウォールマーケット、蜜蜂の館。そこには、男を極める為に通らねばならない何かがあるような気がした。いや、あるに違いない！困った事に、金もある。余程の事がない限り、足りない事もないだろう・・・。
「うーむ。」
やはりどこか自分が目指す『男』とは違うような気もする。
『女を知らなくて男の高みに辿りつけるものか』
旅先で出会ったタークスの女がそう言った。もっともだと思った。男とは、女がいてこそ男と言えるもの・・・そういう考え方も、確かに正論だった。強さだけを求めて、七番街スラムを飛び出したわけではなかった。男を磨く旅とは、あらゆる意味で、男とはどうあるべき、それを突き詰めていけば、そういう経験も必要だと思う。思うのだが・・・・・
やはり、金を払って女を買う事に、些か抵抗がある。欲望に打ち克つ事も、男として重要なのであるが、この場合・・・臆病になっているだけだった。どうもこもない、ジョニーは童貞だった。まだ経験のないジョニーには、まだそういう事に理想があった。
「ああ・・・・入るべきか・・・・入らざるべきか・・・・・」
その言葉には、ジョニーの弱さと好奇が入り混じっていた。
「ははは・・・今日は止めておこう・・・」
蜜蜂の館に背を向けて歩き出す。どうしようもなくみじめな気がした。行きたいのに、行かなかったから。
「くそーゲホッ・・・ゴホッゴホッ・・・」
「もう一杯くれぇー同じヤツだ。」
格好悪いぜ・・・今日のオレ。・・・男になりそこなった日、ジョニーは酒場で度数の高い酒を煽っていた。何だいオレ・・・女を抱く位で・・・ビビッて引き返すなんて・・・
「万キが飲む酒じゃないぜ。」
酒場の主人が、酒を運びながら余計な一言をいう。
「うるせぇ、飲みたい酒を飲ませるのが、アンタの仕事だろうよ・・・」
「まあ、そうなんだがね、酒と上手に付き合えるように育ててやるのも、オイラの仕事さね。」
「・・・・・・・」
畜生・・・格好いい事を言いやがる主人だ。
化物が徘徊するこの世の中、神羅だコルネオだのが幅を利かせているこの街で、何十年も営業している主人は、確かに男として、先輩だった。
「・・・何か悪酔いしないようなモノを作ってくれ・・・」
「あいよ。」

やさしい味の、甘いドリンクが出てきた。
「フルーツは悪酔を防ぐ、まあ、まずはそれを飲みな。」
ジョニーは頷く代わりに、ドリンク代を主人に渡す。
「甘・・・」

世の中何があるか解らない。
不貞腐れて飲んでいたら、初恋の人が現れたんだ。

カランカランカラン・・・
甘いフルーツドリンクを飲んでいた時、血だらけの女が店に入って来た。その女を見て酔いが一気に醒めた。
カツカツカツ
異臭・・・いや嗅ぎ慣れた匂いを纏い、女はジョニーの隣のカウンターに座った。店の客が一斉にその女を見る。
「さっついヤツをお願い。」
「・・・・・」
主人は、さっきジョニーが飲んでいた酒よりずっとドギツイ酒を出した。女はそれを一気に咽の奥に流し込む。
「安酒ね・・・まあ、味なんてどうでもいいけど。」
ジョニーは、その女から目が離せなかった。
ティファ・・・初恋の女だった。
「怪我・・・してるのか?」
思わず声を掛けてしまった。
「えゥ・ええ、不覚。あのテブにやられたわ。」

ティファはジョニーを見ることなく答えた。
女に注目していた客の一人が、ゆっくりと勘定を置いて店を出た。察しがよくて抜け目のない男なのだろう。
ティファの事をアイツに知らせに行ったんだろうな・・・
ドン・コルネオに・・・
ウォールマーケットの顔役で、好色家。
「その傷・・・コルネオか?」
ティファは首を縦に動かして肯定した。
「旦那、これてポーション出してくれ、一番効く奴だ。」
ジョニーは主人にサイフから無造作に金を出して渡す。
・・・ドン・コルネオに逆らうな。呪文のように言葉が浮かぶ。それが、この混沌とした街を生きて行く為のルールだった。しかし、ティファの前では格好付けなければならなかった。
「ジョニー・・・関わるな。」
「金は渡したんだ。早く出せよ・・・!」
主人は、忠告を聞かないジョニーの眼を見る。
「・・・解ったよ。」
トン!
でも、これを持って早く出て行ってくれ。ジョニー、お前には失望したよ。」
「主人、オレもだ・・・・・残念だ。本当だぜ?」
もはや、格好のいい主人は居なかった。
焦り、怯え、汲々としている場末の酒場の主人に過ぎな

い。さっき感じた格好よさは、もう感じ取る事は出来なかった。勘違いだったのか？
イライラした。
「……」
ティファは無言でポーションを飲み干す。
パリンッ…そして、そのポーションの瓶を握り潰した。
「もう一杯お酒を。上等なヤツね。さっきみたいな安酒出したら怒るわよ。」
ガラス瓶で切った指から流れる血で、主人の首に紅い線を指で引く。
「う…くぅ…」
「ま、待て待てティファ。」
それまで、一度もジョニーを見なかったティファが、初めてジョニーを見た。そして目が合った。
「貴方は誰？何故、私を知っているの？」
今日は本当に最悪の日だった。
「一応…オレもスラム育ちさ…七番街の…」
「あ、そうなんだ…でも初めてよね？」
「はあ…覚えてくれてなかったかい…残念だ。男の中の男・ジョニーだ。」
…うざったい…ああ…
ティファは少しだけ思い出した。
赤い髪をして男とはあーだこーだと言っていた男がいた事を。

そっか、ジョニー…ジョニーって言ったっけ…
「ジョニー…さん？」
「そ、そうだよ、ジョニーだ！君はティファ・ロックハートだろ？」
無邪気に笑うジョニーを、ティファは無表情で見つめ返す。
「そうよ。でも、だから何だと言うの？同郷だからってただそれだけでしょ？」
そ、そんな…今日は最悪にして絶望的な日だ。
「でも、ポーションはありがとう。私、ケアル使えないから助かったわ。」
「ははは、いやぁ…」
「ジョニー！…頼む、酒は次来た時に飛びっきりいいのを出すからさ、早くこの店から出て行ってくれ。」
横からカウンター越しに主人が懇願してきた。
「心？」
済まない、どうやら遅かったようだ。

「おいコラ！」
酒場のドアが勢いよく開き、十数人のゴロつきが場内に入り込んできた。そしてティファを取り囲む。
「よう、姉ちゃん…よくもコルネオさんの大事なモノに怪我させやがったな！」
「何よ？あんな瑣末な物、使い物にならなくなった方が、

世の中の為じゃない？」
主人はカウンターの下に隠れる。
「な、何の事ティファ？」
「その女はよう、コルネオさんの大事な部分を握り潰してしまったんだよう！」
「許せねぇ・・・ボスの楽しみを・・・」
「ふん！私は弄られた果てにナイフで刺されたのよ。それくらい何だって言うの！」
「何だと！！！」
弄られた？・・・え？あ？
決して軽くはないショックをジョニーは受けた。
最悪で、絶望的で、最低な日だ。
「ティファ・・・お前、コルネオに手篭めにされたのか？」
「手篭め？・・・まあ、そうかもね。しかもこの通りよ。見てよこの傷・・・全く、可哀相な私。」
ティファは苦笑しながら、ポーションで治りかけたお腹の傷を見せる。
「くう・・・ク、クラウド・・・クラウドは何をしていたんだ！？」
ジョニーは錯乱し、初恋のライバルの名前を口走る。
「助けには来てくれた・・・失敗してしまったけど。」
ティファは冷静に答える。
馬鹿な・・・神羅のソルジャーまでなった男が失敗？
嘘だろ！？何をやってたんだクラウド！！
「まあ、私の事はいいのよ。クラウドが無事逃げられてよかった。」
何かに諦めたようにティファは笑った。
「いくない！」
もちろんだ。もちろんよくない。ティファがよくても、初恋の人が豚とセックスした事実を突きつけられたんだ。いい訳がない。ジョニーはよくなかった。
ティファを囲むゴロツキを睨む。無性に腹が立った。
この悲しみは、暴力で紛らわせてくれ。頼むから、オレをギタギタにしてくれ。お前達をギタギタにさせてくれお願いだから・・・嫌な事を一瞬でいいから・・・忘れさせてくれ。なあ、5分でいいから・・・

オレは戦うぞ。

『かしこまりました。・・・貴方に死の宣告を行います。』
ジョニーは呪いの指輪で身体能力を高め、コルネオの配下を半殺しにした。
「4分半か・・・何とか間に合った・・・」
まあ、もう、どうなってもよかったんだが・・・
ジョニーは指輪をさすりながら、ティファの前に立つ。
「畜生・・・」

一向に心が晴れなかった。嫌悪感が拭えない。
悔しかった。自分は童貞だけど、ティファはコルネオとヤッちまってるんだ。クラウドだったらよかったという問題じゃないけど、よりによってあんな豚と・・・！
ジョニーは晴れない心を思わず口に出してしまった。
そう、何の脈絡もなく、唐突に出た言葉だった。
「なあ、コルネオとヤる位なら、オレと寝てくんねぇか？」
投げ槍なセリフだった。こんな口説き文句はない。
最低なセリフだ。
「はは・・・何それ、まさかそれで口説いてるの？」
「ハハハハ、まあ、何だ、素直な気持ちを伝えたんだ。」
・・・露骨過ぎやしねえか・・・
ジョニーの嫌悪感が更に深まる。でも、次のティファのセリフにジョニーは度肝を抜かれた。
「・・・んーん、そうね。」
「覚悟があるなら、寝てもいいわよ。」
え？爆弾発言だ。
「・・・・・」
「する？」
「ええ！！？」
「しないの？」
「する！しますやりますさせて下さい！」
即答だった。考えることなく、言葉が先に出ていた。

「・・・私のお腹にはヤツの・・・」
「え！？」
「それでも・・・いいの？」
「は、はい！」
「・・・その子はたぶん、貴方を殺す・・・」
「え？」
ティファの眼は真剣だった。冗談で言ってないのは眼が語っている。不思議と、嘘だと思わなかった。コルネオもその言葉を信じた。だからこそ、終わった後ティファの腹を刺したんだ。子供がいると解ったから・・・怖くなって・・・・・最低な奴だ。
「どう？それでも、したいの？」
ティファが決断を迫る。チャンスは一回だけなのだ。
これを逃せば、ティファとは未来永劫ないだろう。
蜜蜂の館の前で悩んだ時とは比べられないプレッシャーを感じた。ジョニーはどうしようもなく臆病だった。
コルネオとヤった女だぞ？いいのか？いくないが、オレもティファは抱きたい！ショックは決して小さくはない。
でもそれ以上に、初恋の人と関係を持ちたい欲求が強い。
だったら、悩む必要はない。
「うん・・・抱かせてくれ。」
勇気を振り絞るように、吐き出す。

「いいよ。」
ティファは笑いながら、あっけないほどあっさり了解した。

ベットの上に座り、ティファはジョニーを見上げる。
微笑して見上げる彼女は、ジョニーにとって最高の美女に見えた。
「どうしたの？」
「い、いや・・・」
「あ、ジョニー、もしかしてこういう事、初めて？」
少し意地悪な笑顔に変わる。女は小悪魔だなんて古典的な表現があるが、まさにその通りだと思った。
「それとも・・・覚悟が揺らいだ？」
「は、馬鹿にするな！」
ジョニーは、ティファの肩を押さえ、ベットに押し倒す。
「知らないよ・・・ずっと先・・・後悔するよ。」
そうかも知れない。
でも、この機会を棒に振れば、一生後悔するに決まっていた。
「正直に言う・・・オレは初めてだ。だから興奮はしていても、慣れていない・・・から、萎えさせないでくれ。」
「困った子ね・・・」
ゆっくりと、優しくジョニーの唇を塞ぐティファ。
「んん、・・・ん。」

ふわっとしたいい匂いがジョニーの鼻腔を刺激し、ジョニーに淫気を纏わせる。
もう、止まる事は出来ない。

ティファの胸に手を置く。
服越しても、その柔らかさと大きさが伝わる。
「あ・・・」
少し力を込めると、簡単に形が変る。本当に柔らかい。
この柔らかさは神秘だと言っていいだろう。
「あ、ああ、ああ・・・」
初めてまともに触れた女性の胸・・・
「どうしたの？・・・・・・服の上からだけでいいの・・・？」
「え・・・あ・・・いや・・・」
ジョニーは服を脱がすのではなく、そのまま服の中へ手を入れる。
「い、痛い・・・」
「こ、ごめん！」
「もう・・・」
スカートを固定するサスペンダーを肩から外し、胸を覆う服を脱ぎ捨てた。形の良い胸が露わになる。
「どう？ちょっと大きいけど、いい形でしょ。」
いや、本当に凄い。ひとつの理想がそこにあった。
ジョニーは、その胸を触り、先端を貪るように吸った。
「ん、いいね・・・気持ちいいよ・・・」

あの豚は、ティファとどんな風にしたんだろう…
ふと、そんなつまらない思いが頭をよぎる。
やっぱり比べられるんだろうか…
そう思うと、何かに押し潰されそうになった。
「もう…どうしたの、元気がないわね？」
コルネオが…ティファを抱いた…それは強い、本当に強いショックだ。でも、今、ティファを抱いているのはコルネオじゃない。ジョニー自身だ。
「いや…その…ティファ美しいね。」
「ありがとう。」
もう一度唇を塞ぎ、ティファの股間に手を伸ばす。
「あ…」
そこは気のせいか、少し湿っていた。
下着の中に手を滑らせ、柔らかく茂った丘から切れ込みに沿って指を這わせていく。
そこは確かに熱く、愛液が溢れ出てくるのがジョニーにも解った。
「ん…」
指が切れ込みの終点まで行く。
濡れた肉の間に軽く指を入れると、何の抵抗もなく、ずぶずぶと指を飲み込んでいく。
「は…あっ！」
深い吐息のようなティファの嬌声に、ジョニーは脳髄が痺れた気がした。

初経験のジョニーには全てが刺激的すぎた。
突然、ティファがジョニーのモノを手でそっと撫でる。
「あうっ！？」
その刹那、限界を超えた彼は、ティファの手に放った。
「あ…ごめん…オレ…」
情けなさと恥ずかしさで、軽くパニックになりながら、ジョニーはわけもわからず謝る。
「ふふ、初めてだもんね、全然大丈夫だよ。」
ティファは優しく微笑み、白く汚れた指を口に運ぶ。
ちらりと見えた赤い舌が、白い液体と絡むのを見た。
「ここからは、明かりを消して…恥ずかしいから…」
明かりを消し、ティファの行為に身を委ねた。
「私に任せて。」
そこからは、淫美な声だけが闇に響く。
「…自分の子に殺されちゃうよ？はあ、ああっ…」
「あ、ああ…」
「いいの？本当？本当にいいの？」
「ああ、お願いだ。」
解ってないよ、ジョニー…それがどういう事か…
闇は更に深まり、男と女の匂いと声が闇を彷徨う。
ティファはジョニーを受け入れ、ジョニーは童貞を捨てた。

FIN

え？
胸でしたい？
じゃあ
はいっ
やさ、
ん
ふ、
ふ、
ふ、
ちゅぷ
ちゅぷ
ちゅぷ
んん…
口に入らないよ

あは・・・
濃いなぁー

※おまけページは 2005. 9 月発行のコピー誌より転載したものです

FOR ADULT ONLY

INNOCENT GIRL 2

2006.12.31
発行 アトリエゆたんぽ

印刷 株式会社ポプルス様